　『一先ずの計画が完成したわ。データを送るから確認して』

　何でか私の服を再現して、何時ものクロップジャケットの上に着ているアリアが言う。私の記憶が一部蘇って以降、アリアとの距離はかなり近付いていた。

　勿論、警戒を怠る気はない…こいつはローグAIだ。

　目的は一先ず、アステリアの再生にあることは確からしいのだが、偶に言わない情報がある部分などからして、正直信頼できる存在とは言えない。

　しかしこの模倣体でさえ私は感謝していた。あの記憶がそれほど印象深いものだっただけのことだ———私はあの時点で、完全に彼女から離れる気が全く起きないほどにサンドラに入れ込んでいた。今、目の前に居ない彼女を思い起こせるだけで感謝するには十分だった。

　RZ用のフォーマットで送られてきた計画の動画を再生する。新ネットからアリアが収集してきた情報をもとに建設されたプラン———未だ多くの不確定要素を孕むが、十分に実行可能なプラン。遂にこれで先に立ちはだかる霧が晴れる。全てが始まるのだ。

　『まず目標の再確認から始めるわ。目標は氏名未詳の召喚者。最も所在の可能性が高いのは———バルセロナに該当する場所に存在する都市メリディエアレン。』

　アステリアは結局ダイヴしてくることはなかった。

　アリアは衛星に居る私のクラスメートたちから記憶を抽出して回ったようなのだが、アステリアに転移後に会っている人間は全く居なかった。

　そして衛星上に召喚者が居る可能性は最早なくなった…神経膠は衛星を失ったからである。

　メリディエアレン。魔術師の聖地の如き場所であり、マギアティクスの聖地とも呼ばれる、世界的な魔術研究都市———先鋭的魔術結社の影を、アリアはそこに求めた。

　尤も確率は低い。メリディアルのの情報は殆どネット上に出回っていないのだ。大体怪しげな陰謀論で第十の輪の番人とか、消えた宇宙からの使者とか、そんな一切信憑性のない秘密結社として語られているだけだった。

　しかし、企業のデータバンクなどの解析を進めるうち、徐々に内部情報から神経膠の存在が確かにちらついてきた…

　一部の、エージェントと思われる者からのコンタクトの情報が出回っているのだ。そして、最も気付きやすかったのは…

　『パラノイアの可能性を疑うほどにAIや未確認のアルゴリズムに対して敏感な組織の追跡を避けるため、情報収集の範囲は制限されたが、外について十分な情報は集まった』

　そう。神経膠は異常にAIに対して警戒的だった。アリアが遠隔的に動かそうとした私のクラスメートは、AI侵入の疑いによって殺害されてしまったくらいである。

　大体の神経膠からのコンタクトはAI、特にブラックボックスとしての性質が強いディープラーニングを開発しようとしている人物に対してで、彼らは往々にしてコンタクトされた直後から研究や開発を停止しているのである。

　『直接メリディエアレンに侵入しても情報が見つかる可能性は低い。現在のメリディアルの神経膠の態度からして、私達が迅速に排除される可能性もある…

　よって、一旦仕事仲間を収拾したのち、向こうへのコンタクトを図ることにするわ』

　現状、異次元存在との交感能力を持つような異常者とコンタクトするのは全く賢明ではない。従って、私はしばらく自身の出自を隠しながら仲間を集め、自身の安全を確保したのち神経膠への連絡を試みる。

　やり方は簡単だ———彼らは、私と共に来た残りのクラスメートを監禁し、旧ネット———判明したことだが、人間をただの汚いjsonファイルか何かだと思って破壊するかコントロールしに来るAIの巣窟———にダイヴさせ続けていた。このように奴隷扱いしている相手が、そのあたりを歩いてそんな秘密結社が存在すると吹聴するのは、神経膠にとって許し難いのである。見つけた瞬間に排除しに来るだろう。そこを捉え、向こうを巻き込んで取引を行う。実質的にブラックメールに近いこれを実行するのに必要なのはブルートフォースただ一つであり、即ち…

　『つまりロイド、あんたには傭兵界の伝説になってもらうわ』

　私のキャリアはこの世界の伝説になることから始まるのである。

　『そのためにはまずCAを脱出。ロイドの顔を知る同級生たちという制御不可能な変数を避けるため、他人に成り代わって活動する。CAの隔離壁近郊にあるジャンクヤードがスタート地点として最適の地点になるわね』

　CAの衛星画像が広がる。立ちはだかる60m超の、内外に向けられた二列銃座を備えた隔離壁。それを南に超えた先には、旧世界と隔離壁外側の新世界の廃棄物が集まるジャンクヤード、あるいはランドフィルが広がっている。

　ランドフィル。文明の排泄場所。エントロピーのたまり場。地球で言えば、第三世界最貧の都市スラム。

　言葉を尽くしても説明しきれないような、この世界きっての地獄の一つだ。

　CAよりも人の入れ替わりが激しく、入った人間の平均生存時間が5日に満たないこの地獄ならば、一切の足跡や不審な行動を捉えられることがない。どれだけ能力が高かろうとも、ここに投棄された人間の行く先など全く不詳になるのである。

　そして———この地獄にやってきた人間の一人のライフパスを、私は乗っ取るのである。

　『・””・・

———行動抑制チップと顔面インプラントを利用し、ロイド、あんたには彼になってもらいましょう。それからスクラップヤードを脱出し、最寄りの都市でもある・・に入る』

　3Dイメージが広がる。

　シウダード・デ・シェノフィリア、略してCX。席層構造の摩天楼群、傭兵の都、殺人が自殺と老衰を合わせたよりも死の多くを占め、ただそこに突っ立っているだけで全てを破壊される可能性のある都市。コンクリートと強化プラスチックでできた肉引き機、アラモゴード最悪の都市。

　2世紀ほど前にはCAがその汚名をかぶっていた全てを引き受けるメトロポリスが、CAを囲む隔離壁を超えたすぐそこ、モロー・ベイの埋め立て地に広がっている。

　そこから弾き出された一人のネットランナーの名は、レイフィールド・アーウィング・アルテリックス。のアナロジーを用いたハンドルネームで活動していた傭兵ネットローマーで、数日前にギャングにトラックされ、これからランドフィルに投棄される予定の男である。

　ランドフィルに彼が投棄された暁には、事前にマルウェアとなって侵入していたアリアが行動を操り、ランドフィルの奥へ誘導。誰も見ない場所まで来たところで、私が成り代わってランドフィルを出る。

　第三世界最貧の地獄の様な光景を見ることになるが、それもこの世界を知る行動の一部と言えるだろう。私は義憤に身を震わせたことなどない。だが、企業の引き起こす格差の、下側の末端を覗いていくことは恐らく必要だと考えている。

　〈さながらスパイのように、召喚者に到達するミッションを遂行することになるな…

　私はローグAIからのエージェントか〉

　イントロダクションが終わり、ウィンドウが閉じる。

　『そ。エージェントNo. 1、それでは準備よ』

　アリアが微笑んだ。

　―、略してSPAM。それは生体分子と金属結晶の結合を可能とする高度材料であり、私とローグAIの世界の橋渡しとなる物質であると同時に、私の皮膚ともなる物質である。これによって私の生体回路は最早インターフェースを介さずに機会と接続するレベルに至った。

　そして驚くべきはこの物質と魔術の根幹となるPSFの親和性。

　突然だが、面の皮が剥がれるという経験をするのは、別にレアな体験ではない。だから、この状況で面の皮、筋肉、そして骨を剥がれることはなんら不思議ではない。

　2053年では、美は完全に金で買えるものだった。そして文明が崩壊した現在もそうであるらしい、とは新ネットのブリーチでアリアが取ってきた情報である。尤も、外の人々は基本的に侵襲式のインプラントや整形手術を嫌うので、相当覚悟を決めた人間———例えば賞金首やスパイ———じゃないとやらないらしいが。

　しかし、私のケースでは行動抑制チップと組んで表情を模倣できる機能までついている。以前、カウンターインテルからギリギリスクレイプできたデータによれば、一部の政府機関やコーポのエージェントが使っている程度だという話だった。

　ではそんなインプラントは何処からやってくるのか。勿論、コーポの秘匿研究施設とか、工業集積施設の閉鎖セクターとかそういった場所だ。

　この私のフェイスインプラントの場合は、元は衛星上で製造されたらしい。2076年時点ではCAの・の施設に保管されていて、例によってアリアがMSHQに持ってきて、そして今私の顔にインストールされている。

　表層を覆うSPAMテクスチャによって、肌色は自由自在。人工筋肉は勿論全SPAM製なので、正真正銘の鉄面皮である。

　インストールした後は接合部が形状変成性質を持つ材料で埋められ、完全に隙間のない顔が出来上がる。これがリアルタイムに顔型を変えているので、キャラメイクシーンを現実で実行しているみたいに見えた。

　『さて、模倣対象の顔と身体に変えてみましょうか』

　レフの便利なところは5日前にブリーチを始めたときから行動をトラックしていて、交友関係や癖、行き着けの店といった詳細が把握できているところだ。身長や体格も私とさして変わらず、ネットランナーなのでハックするのが本職。

　魔術の才能もそこそこあり、傭兵にも成れる男だったが、前線に立たなくていいのでネットランナーになったようだった。

　有望な模倣対象として私達が監視していたこの男は、2日前に受けたでしくじり、ハックをかけたギャング、ベルナドッテから逆探知されてしまった。

　ベルナドッテの構成員にハイドアウトを囲まれてしまった彼は捕まり、魔術的に尋問された後、動けないよう拘束された状態でランドフィルに捨てられた。

　しかしこの男の不運はこれでは終わらなかった。この時既にこのレイフィールドを私の模倣先にすることに決めていたアリアはこの男の神経系にすでに侵入しており、発狂したように見せかけて魔術を四方八方に行使させ、ランドフィルの奥に走らせたのである。

　ランドフィルの奥はアリアが管理しているここ、CAから「漏れ出した」機械兵器が跋扈する戦場である。普通行っては助からない。

　しかし、勿論こんなものはマッチポンプに過ぎないので、レフはそのまま何にも攻撃されることなく、人目の付かないランドフィルの最奥に到着、そこで精神は抜き出されてコンストラクト化し、アリアに吸収された。

　身体の方は、イミテート対象として回収されMSHQに保管されている。精神抽出の段階でアリアのプログラムで殺されており、現在はクライオティックプールで極寒と代謝の停止を楽しんでいるところである。

　〈どう、レフに見える？〉

　フェイスインプラントが形を変え、レフの緑の目、浅黒い肌、立派なローマ鼻を再現していく。個人的に評価するならまあまあな顔。ちなみにCA外の評価基準でもそこそこである。若干いかついが、Mr. Nobodyと言った感じだ。

　顔以外も肌色を変えていく。現在私の皮膚は満遍なく数種類のSPAMで構成されるテクスチャ層が覆っている。その中には光学迷彩のように簡単に色を変えられるものも含まれており、これを利用して全身にレフの浅黒い肌を当て嵌めているわけである。

　『ええ、全く別人ね。違和感もないし、後は行動抑制チップ…どう？』

　「、これが今の俺か…随分逝かれたクロームアップを施したもんだな、ほぼジャンキーみたいな感じだ」

　『Okay、レフの口調をイミテート出来てる。まあもともとそんなに変わらないけど。さて、模倣対象とミッションの復習』

　「俺はこれからCX がCA周辺に作り上げた隔離壁を超え、巨大な廃棄場地獄でゴミと汚染の塊、ランドフィルを、俺自身を演じながら抜ける。んでもって、最寄りの都市 , CXに到着したら、傭兵として前回失敗した仕事の後始末をし、キャリアを再出発する」

　『その通り。そして貴方はこれから傭兵、特にソロの仕事も実行する。理由は？』

　「ランドフィルで魔術が役立ったから。ネットランナーになろうとCXの危険からは逃れられないと悟ったのもある」

　『グレート・ジョブ。それでいい。それでは次、魔術の復習』

　「AC…」

　その言葉に、私は3日前に学んだ魔術の基礎を思い出した。

——— ——— ——— ———

　「様々調査する中で判明したのは、魔術には利用として3分類存在するということ。根本原理は全く同一、物理とも調和するもので、3分類は応用に関するものに過ぎない。」

　誰も居ない大学の講堂。入ったことはないが、カーボ・アスル大学の大講堂らしい。

　現実に居るわけではない。ただの仮想現実である。旧ネット上のメタヴァース、「」がまだ生き残っていたので、それを利用してセッションを立て、単純にプリセットにあったのでこの講堂を選んだ。

　ヴァ―チューなので、アリアの声は頭に響いているのではなく実際に空間に響いているように聞こえる。

　さて、ところで魔術の3分類…それが、

　「」

　「」

　「」

　である。

　放出操作は最もポピュラーな類の「直接」魔術と言っていい。基本は体外へのPABストアの放出で、熱や光と言った形で出現する。

　直接、と名前がつくのは、一切の道具を利用せずに実行する魔術だからである。大概の人間は直接魔術は使いこなせず、銃やブレードを使って魔術を行使する。それらにビルトインの回路を利用し、実弾の威力を強化したりレーザーを発射したりするわけである。このような道具を介する魔術を「間接魔術」と呼び、誰でも使えることで定評がある。

　身体補助操作はもっと複雑である。最古の魔術と名高いこれの役割は、「感覚鋭敏化・反応速度上昇・身体操作精度上昇・身体強化」である。

　これらは体内物質の連絡